

森里海連環学に基づく東北復興のための  
第5回京都大学学生ボランティア事業報告書

(平成25年9月23日～28日)

京 都 大 学

## 目 次

1. 第5回学生ボランティアの派遣について .....	2
2. 参加者.....	3
3. ボランティア活動内容.....	5
4. 参加学生による活動報告.....	8
(1) はじめに.....	8
(2) 労働ボランティア各担当からの報告（活動内容報告・課題反省など） .....	8
(2-1) 教育支援 担当.....	8
(2-2) カモメネット（農園栽培支援） 担当.....	11
(2-3) 気仙沼市役所訪問 担当.....	11
(2-4) 馬場国昭氏の講演 担当.....	19
(2-5) 水山養殖場（養殖作業・森のお手入れ） 担当.....	21
(2-6) 気仙沼大島観光 担当.....	25
(3) 研究ボランティア各担当からの報告（活動内容報告・課題反省など） .....	28
(4) 次回以降に向けたその他の課題・提案.....	29
(5) おわりに.....	29
5. 今後のボランティア活動に関する課題、留意点（フィールド研） .....	30
(1) 学生による企画について.....	30
(2) 今後の活動について.....	30
(3) ボランティア活動の支援体制について.....	31
6. 記録.....	32
(1) 記録写真.....	32
(2) 第5回学生ボランティア派遣の応募チラシ.....	36
(3) 事後報告会に関して.....	38
7. 特記事項（放射能測定の結果など） .....	38
8. 謝辞.....	38

## 1. 第5回学生ボランティアの派遣について

京都大学は、平成25年9月23日から9月28日の間、ホームページで公募した学生25名と教員2名、事務職員3名、技術職員1名を宮城県気仙沼市の宮城県気仙沼高校および同市西舞根地区の水山養殖場、岩手県陸前高田市に派遣し、東北復興支援ボランティアを展開した。

ボランティア参加学生募集は、平成25年7月8日から12日にかけて、各学部・大学院の教務掛を通じて、申込書を提出する形式で行われた。毎回募集人数を上回る応募があるため、人選に苦慮しており、前回より申請書に志望動機を記入してもらい、それも参考に選抜を行っている。

募集に先立つ平成25年7月4日に第4回学生ボランティア参加者有志によるボランティア事前説明会が開催された。第4回に派遣された学生の一部が気仙沼高校との交流会を学生独自で企画し、前もって高校との情報交換を行っており、その経験談が伝えられた他、第5回への継続企画が提案され、これに対する積極的な協力が第5回参加学生に要請された。

被災地では、足並みがそろっているわけではないが、復興の兆しもみられ、労働ボランティア活動への需要は減少傾向にある。今回はそのことを踏まえ、労働的なボランティアを水山養殖場での活動を1日に限り、農業支援や教育支援といった大学の特徴を生かしたボランティア活動を中心においた。

今回の活動も、前回同様、学生諸氏はしっかりと自己管理を行い、病気にかかったり怪我を負う者は一人もなかったことは幸いであった。また、1日は班に分かれ、現地を視察する日を設けたが、各自自覚した行動をとり、京都大学生として恥ずべき行動もなかったことは、学生諸氏の真摯な活動の結果である。

なお、11月13日にフィールド科学教育研究センター第1会議室において今回のボランティア活動の報告が参加学生により行われた。

第5回京都大学学生ボランティア引率者代表

フィールド科学教育研究センター 教授 徳地直子

## 2. 参加者

労働ボランティア (24名)

氏名	学部/研究科	学科/専攻	回生
犬塚 優	文学部		1
上田 恭也	法学部		5
内野 宏俊	理学研究科	地球惑星科学専攻	M2
大塚 麻季	法学部		4
大村 榛菜	法学部		5
菅野 直美	アジアアフリカ 地域研究研究科	アフリカ地域研究 専攻	D3
木曾 佑砂	法学部		1
小西 保彰	工学部	物理工学科	3
佐々木 文	教育学部		1
佐東 芳輝	情報学研究科	知能情報学専攻	M1
重野 紘輝	理学研究科	化学専攻	M2
清水 蓮子	法学部		5
正木 かおり	総合人間学部		3
辻井 大喜	法学部		5
中川 拓夢	教育学研究科	教育科学専攻	M1
中村 優紀奈	医学部	人間健康科学科理 学療法学専攻	3
福島 由章	理学部		3
福山 美咲	工学部	物理工学科	4
藤本 典大	農学部	資源生物科学科	2
前田 有紀	薬学部	薬学科	6
箕浦 広大	農学部	資源生物科学科	2
弥勒 安紗	公共政策大学院		M1
物井 佳奈	総合人間学部		4
米山 奈緒子	法学部		4

研究ボランティア (1名)

氏名	学部/研究科	学科/専攻	回生
太田 充亮	公共政策大学院		M2

引率教職員(6名)

氏名	所属・職名
徳地 直子	フィールド科学教育研究センター教授
鈴木 啓太	フィールド科学教育研究センター助教
牛田 俊夫	農学研究科等事務長補佐 (フィールド研担当)
岡島 徹	北部構内共回事務部施設安全課長／農学研究科等副事務長
小嶋 和宏	北部構内共回事務部経理課経理掛長 (フィールド研経理総括掛)
佐藤 修一	フィールド科学教育研究センター技術専門員

### 3. ボランティア活動内容

平成25年9月23日(月)

6:30 京都大学理学部正門前(今出川通り沿い)集合

6:54 出発

大型バスが前回までの集合場所であった京大正門前に誤って配車されたため出発時間が遅れてしまった。

7:15 京都東 IC にて名神高速道路に乗る

7:58 多賀 SA にて休憩

8:10 多賀 SA を出発

8:26 米原 JCT にて北陸自動車道に乗る

10:12 徳光 PA にて休憩

10:25 徳光 PA を出発

バスレクを行う(ビンゴ大会と自己紹介)

12:25 名立谷浜 SA にて休憩

昼食をとる。

13:00 名立谷浜 SA を出発

14:32 新潟中央 JCT にて磐越自動車道に乗る

15:50 磐梯山 SA にて休憩

16:05 磐梯山 SA を出発

16:31 郡山 JCT にて東北自動車道にのる

18:41 金成 PA にて休憩

18:55 金成 PA を出発

19:07 一関 IC にて一般道に降りる

19:15 一ノ関駅にて引率職員3名が下車(現地での少人数の移動手段としてレンタカーを借りる)

20:30 セブンイレブン気仙沼唐桑町店にて各自必要なものを買う

20:51 からくわ荘に到着

21:00 からくわ荘にて夕食

21:40 ミーティング開始

9月24日(火)

7:00 朝食

8:30 からくわ荘 出発

(研究ボランティア1名をレンタカー①で相手方との待ち合わせ場所のお魚いちばへ送り、その後レンタカー②を借りて、気仙沼市役所で労働ボランティアと合流)

9:25 気仙沼市役所 到着

気仙沼市役所 取材

11:55 気仙沼市役所 出発

12:05 お魚いちば 到着

昼食

13:00 お魚いちば 出発

13:15 気仙沼高等学校 到着

空き教室をお借りして準備

14:50 2年生各クラスへ7限目(LHR)の講義

- 15 : 35 講義終了、座談会等の準備
- 16 : 00 座談会等  
(16:00 取材が終了した研究ボランティア1名をレンタカーでお魚いちばへ迎え、気仙沼高校で労働ボランティアと合流)
- 17:45 座談会等終了、片付
- 18:00 気仙沼高等学校 出発
- 18:30 セブンイレブン気仙沼唐桑町店
- 18:50 からくわ荘到着  
夕食など
- 20:30 ミーティング開始

9月25日(水)

- 7:00 朝食
- 7:30 出発 徒歩で唐桑半島ビジターセンターへ
- 8 : 30~9 : 30 唐桑半島ビジターセンターでの活動 (料金 300 円)  
津波体験館で津波を疑似体験 被災した方のコメントなども見る  
唐桑の動植物・鳴砂などについての展示を見学  
震災直後の気仙沼周辺の様子を写した写真を見る  
津波の起こる理由や津波の歴史について学習
- 9:30~9:50 バスで巨釜半造へ移動
- 9:50~10:10 巨釜半造見学、沿岸の景色を楽しむ
- 10:10~10:20 バスで漁火パークへ移動  
唐桑半島を一望できる漁火パークで活動場所の全景を見学。  
窪んだ所で集合写真を撮る。
- 10:40~11:00 バスで鹿折地区へ移動  
津波で陸地へ打ち上げられた第十八共徳丸(解体中)を見学  
復幸マルシェ訪問 おみやげ購入・お店の方との交流など  
(研究ボランティア1名をレンタカーでお魚いちばへ送り)
- 11:40~12:00 バスで齊吉商店へ移動
- 12:00~13:10 齊吉商店にて昼食 新鮮で美味しい秋刀魚や鰹をいただく
- 13:10~13:40 バスでフェリー乗り場へと移動
- 13:40~ フェリー出航
- 13:40~14:00 フェリーで気仙沼大島へと向かう
- 14:00~17:15 気仙沼大島観光  
4人×6班に分かれて復興状況を見学。(約半数は予約できたレンタサイクル、残りの人数は徒歩で移動)  
各々の班が自分たちのチェックポイントを目指す
- 17:15 気仙沼大島観光協会前に集合 自転車を返却
- 17:30 フェリー出航 気仙沼へ帰る
- 17:30~17:50 フェリーで気仙沼へ
- 17:50~18:20 バスでからくわ荘へ移動  
(レンタカーで研究ボランティア1名をお魚いちばへ迎え、交替職員の小嶋掛長を気仙沼駅へ迎え、その後からくわ荘へ)
- 19:00~ 夕食
- 20:00~21:50 馬場国昭氏への取材

震災当時の津波の様子を収めたビデオを見せていただく  
馬場氏自身の体験や現在の活動、仮設住宅の様子についてのお話をさせていただく  
質疑応答

22:00 活動終了 各自就寝

9月26日(木)

7:00 朝食  
8:00 出発(水山養殖場周辺は道路幅が狭いため借上げマイクロバスで移動)  
9:00 ひこばえの森交流センター到着、お話、作業場所へ移動  
9:30 除草作業開始  
(10:00 レンタカーで徳地教授と牛田事務長補佐を気仙沼駅へ送り、交替教員の鈴木助教を  
迎え、水山養殖場へ)  
10:30 作業終了、ひこばえの森交流センターへ移動  
11:00 お話、水山養殖場へ移動  
11:50 水山養殖場着、昼食(お弁当)  
13:00 牡蠣小屋での作業(牡蠣の大きさ選別)  
14:00 牡蠣・ホタテをいただく  
15:00 畠山重篤氏の青空教室(森・里・海連環学について)  
16:00 終了、宿舎へ移動  
16:30 宿舎着、入浴等  
19:00 夕食  
19:50~ ミーティング、お楽しみ会

9月27日(金)

6:40 朝食  
7:15 荷物搬入(復路バスの連続運行時間制限のため借上げ中型バスで移動)  
7:30 出発(お風呂の準備も持って中型バスへ)  
(レンタカーで岡島課長を気仙沼駅へ送り、陸前高田カモメネットへ)  
8:30 陸前高田カモメネット(農園栽培支援)  
9:00 作業開始  
12:00 昼食(お弁当)、収穫したてのトマトやしし唐をいただく  
15:15 作業終了、その後一本松など見学  
16:00 移動  
16:30 入浴(亀の湯)、食事(南町紫市場)、お土産購入  
20:00 気仙沼を出発  
21:00 一関駅にて職員2名(レンタカー返却のため先に出発していた)がバス乗車  
途中下車2名は解散  
21:13 一関ICから東北自動車道に乗る(往路と同じ経路を使用し、途中は約2時間おきに  
トイレ休憩)

9月28日(土)

7:40 多賀SAにて休憩、朝食をとる  
8:10 多賀SAを出発  
9:30 京都大学理学部正門前に到着

#### 4. 参加学生による活動報告

##### 第5回京都大学学生ボランティア報告書

平成25年12月26日(木)

作成 第5回京大学生ボランティアメンバー

#### (1) はじめに

第5回京都大学東北復興支援学生ボランティア(以下、京大ボランティア)の実施にあたり、多大なご支援を賜り厚くお礼申し上げます。おかげさまで大変実りの多い活動となりました。私たちは活動中に毎日ミーティングを行い、各活動で良かった点、反省すべき点をメンバー間で共有してきました。また、活動後にも複数回ミーティングの機会を設け、第6回以降に向けた提案もいくつか挙げました。ご一読下さいますようよろしくお願い申し上げます。そして、第6回京大ボランティアの活動に対しても、これまで同様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

#### (2) 労働ボランティア各担当からの報告(活動内容報告・課題反省など)

##### (2-1) 教育支援 担当

(気仙沼高校の2年生(35名程度×7クラス)に対して、労働ボランティア各2,3名を組み分けし、各組がそれぞれ事前に準備をしてきた)

##### 【当日の流れ】9月24日(火)

13:15	気仙沼高校到着
14:30 まで	空き教室をお借りして、各組打ち合わせ 先生への挨拶(天野先生・庄司校長) アンケート質問項目確認
14:30~14:50	教室設営
14:50~15:35	2年生各クラスにおける講義(7時限目・LHR)
15:35~16:00	座談会等の準備、構内での宣伝活動
16:00~17:45	座談会&生徒会、ボランティア・フレンドリークラブとのミーティング
17:45~18:00	座談会等終了&片付け
18:00	完全撤収

##### 【アンケート統計】

質問項目:「今日の授業の感想(5段階評価)」

※1(不満) ———— 3(普通) ———— 5(大変満足)

1組：4.6点

2組：4.4点

3組：4.3点

4組：4.3点

5組：4.3点

6組：4.1点

7組：4.7点

(平均値：4.4点)

質問項目：「今日の授業の感想（自由記述）」

- ◆サークル紹介冊子がおもしろかった
- ◆進路選択の参考になった
- ◆職業選択の参考になった
- ◆京都大学のことがよく分かった
- ◆就職を考えていたが進学も考えてみようと思った
- ◆教員を目指している人がいて参考になった
- ◆大学の話を聞く機会がなかなかなかったので良かった
- ◆修学旅行（京都）に早く行きたくなった
- ◆大学というものがこれまで遠い存在だった
- ◆大学生活がイメージできた
- ◆京大の情報は気高×京大通信だけだったので、生の声が聞けて良かった。
- ◆早く大学生になりたいと思った。
- ◆京大は勉強ばかりかイメージしていたが、遊びも勉強もしっかりやっている。
- ◆メンバーが仲良さそうで見えて楽しかった
- ◆去年とは違う京大の話が聞けて良かった。また来年も来てほしい。
- ◆あんまり声が聞こえなかった。メンバーだけで盛りあがっているように感じた。
- ◆方言（関西弁）まじりだったので、京都の雰囲気が分かった。
- ◆「大学生」とはどんな生活をしているのか、どんな人がいるのかよく分かった。
- ◆目指す方向は違っていても、勉強の考え方や心持ちは聞けて良かった。
- ◆京大はとてもサークルが多いのだなと感じた。
- ◆意志を強く持つことの重要性が分かった。

- ◆大学院について知れてよかった。
- ◆修学旅行がとても楽しみになった。
- ◆エアロゲルがおもしろかった。
- ◆実物のものをたくさん見ることができてよかった。
- ◆改めて大学に行けないのではと感じた。
- ◆八つ橋ありがとうございます。
- ◆学部、修士、博士という課程の違いが知れて良かった。
- ◆大学の勉強だけではなく受験のことも聞けて良かった。
- ◆観光名所の話をもっと聞きたかった。
- ◆舞妓体験の話が聞けて良かった。
- ◆大学院についてもっと知りたいと思った。
- ◆事前アンケートで聞きたかったことを話してくれたのが良かった。
- ◆ノートや時間割を見ることができて良かった。
- ◆京大生なので、受験勉強を 10 時間近くしているかと思ったらそうでもなさそうなので、びっくりしました。
- ◆勉強と京都についての 2 つの話があったので、飽きずに集中して聞けました。

## 総括

各クラス話内容や取り組みが異なるが、基本的にどの生徒も満足してくれていた。5 段階評価もおおむね良好と言える。最も多かった感想は、「大学のイメージが湧いた」「進路選択の参考になった」「サークルがすごく楽しそう」「修学旅行に行きたくなった」・・・等。

一部声が聞き取りにくかった、逆に大学が遠い存在に感じたなど意見もあったため、次回以降の留意事項としてもらいたい。気高生のすべてが大学に進学するわけではなく、就職する生徒もそれなりの割合でいることや、多くの生徒が就活性であることにも次回から注意したい。一方で、各クラスのお土産や実物資料など「目に見えるもの」を用いて話をすると、とても評判が良い印象であった。

## (2-2) カモメネット (農園栽培支援) 担当

### ◆はじめに

5 日目のほぼ一日を使って岩手県陸前高田市のカモメネットにて労働ボランティアを行った。陸前高田市はとりわけ津波の被害が大きかった地である。津波によって流出した住宅跡地を畑として再生させるべく、カモメネット代表の後藤和利氏の指導の下、土地を耕し、苗を植える活動を行った。

### ◆一日の流れ (9月27日(金))

7:30 からくわ荘 発

8:30 カモメネット着

早く着きすぎたようで、ひとまず休憩

全員でラジオ体操

9:00 5人が野菜を収穫・間引きして、残り的人で畑の耕作を行った。

10:00 後藤氏と辻井氏が車で苗と種を買いに行く。

残った人は休憩。ごぼうを一生懸命収穫した人もいました。

11:00 畑の耕作再開。白菜の苗を植え、水まきも行った。

12:00 収穫したてのトマトやしし唐を頂く。美味！

昼食はビニールシートを敷いてお弁当。

13:00 活動再開

畑に肥料をやり、ホウレンソウの種まき。水まきも忘れない。

14:00 そのまま水を撒く人、土の選別をする人、別の畑を耕す人の3つに分かれて活動

14:30 自分たちの作った畑にネームプレートを立てる。

畑にて記念撮影

15:15 おおむね予定通りに終了

### ◆反省・感想など

- ・到着後、早く着きすぎたためにいきなり休憩からのスタートになってしまった。皆にいつもより早起きしてもらったにもかかわらず申し訳なかった。
- ・休憩時間が多かったものの、その間に後藤氏から震災当時のお話を伺うことができた。
- ・収穫したてのお野菜を分けて下さり、みんな喜んで持ち帰った。お土産！
- ・有志8名で、12月初旬に再訪し、野菜の収穫を行った。

## (2-3) 気仙沼市役所訪問 担当

【気仙沼市役所のご出席者】(敬称略)

菊池 氏 震災復興・企画部 震災復興・企画課震災復興・企画掛(司会進行)

菅原正浩 建設部 計画・調整課課長補佐兼企画掛長

金野 孝 建設部 参事(基盤再生担当)(以前は人事)

藤野義和 建設部 都市計画課土地区画整理室室長(東京から派遣・区画整備のエキスパート)

村上秀一 産業部 水産基盤整備課 技術補佐兼基盤整備係長(防潮堤建設など)

なお、24日午前11時終了のところ延長し、11時45分頃終了となった。形式は、事前に提出していた質問に回答・説明をしていただくというもの。

① 一般的に被災地では、復興計画に従って公共事業が進んでいると思いますが、人的不足（マンパワー不足）・資材不足などが原因で、当初の予定より遅れている地域が多いと伺っております。（ましてや、オリンピックの関係で、今後は、東京を中心にした公共事業の割合が増える可能性があります。）気仙沼についてはどうでしょうか？

（回答）

人的不足、資材不足はある。奥尻島の津波や山古志村とは違い、被災地域が格段に多い。一斉に工事を始めているので北海道～九州までの地域から集まった人間、資材がある。市内を走るダンプのナンバーを見れば多様さがわかる。

● 宿泊施設不足

作業員の宿泊施設が足りていない。震災前はホテルが何軒もあった。復旧したものを使っているほか、ゼネコンは長期にわたるため経費削減できるので、自分たちで宿舎を作って復興事業をやっている。

● 市役所職員の不足

発注元の役所の職員が不足しているので発注ができない。藤野氏はじめ専門家を他地域から呼んで行っている。十数年前に区画整備をやったきりでノウハウが不足しているというのもある。全国の市町村へ232人の応募を出して、178人が来てくれている。多くは土木関係。その約半数は建設部が配属し、事業を発注。発注の管理もしないといけない。

（回答を受けての質問）

それほど様々な地域から職員が集まっていれば仕事の進め方が違って、業務に支障や齟齬は生じないのか？

（再回答）

同じ市町村でも仕事の進め方が違うのは確か。しかしそれをどう捉えるかで、違うことは悪いことではない。職員交流を通して、研修をさせていただいているのだと認識している。特に区画整備に関しては全くノウハウがないので「気仙沼方式」など存在しなかった。その他の部分では話し合っ、最善のやり方を選択しつつやっている。178人のなかには関西の阪神淡路の経験者も居て、当時の教訓など共有してもらっている。

② 防潮堤問題に関して、気仙沼では舞根地区の一部を除いて、10メートル前後の防潮堤を造る計画が存在・着工していると伺っています。しかし、国土強靱化（ナショナル・レジリエンス）と住民保護という目的がある一方で、住民の賛同が十分に得られている地域は少ないと聞きます。また、美しい景観の喪失（観光客の減少）、人口流出のおそれ、（森と海が切り離されることによる）漁業への影響に対する、十分な評価（アセスメント）が行われていません。奥尻島での「先例」もあり、なおさら心配しています。気仙沼地域の防潮堤計画についての進捗状況・計画変更の有無（可能性）について教えてください

（回答）

防潮堤に関して、66か所の了解(76%)を得ているが24%はまだ。美しい景観の流出や漁業への影響、人口流出が懸念されるため。国・県だけでなく市も一緒になって説明会を行っている。今年中には了解を得たい。地元の復興関係者は了解しているがその周りが了解していない。

（回答を受けての質問）

周りとはどこのことを指すのか？

（再回答）

海から遠いところや高台などに住む地域の住民のこと。港湾付近の住民は防潮堤が欲しいというのに、彼らは反対している。しかし100人のうち直接関係しない90人が要らないと言ったからと言って作らないでいいのか。多数決ではなく欲しい人の気持ちも理解すべき。梶山氏は漁業

関係者だけが防潮堤には反対と聞いている。「奥尻島」の先例とあるように、防潮堤によって山からの養分が海に届かなくなることを危惧する漁業関係者は防潮堤に反対なのではないか  
彼の住む西舞根はもともと防潮堤がなかった。20棟あまり流されてしまっている。その住民は全て高台に移転する署名があつたのでいらぬとのことだった。そのあと行政で調査した結果、守るものが本当になぬということだ。防潮堤計画をやめた。漁業への影響はわからぬ。水際に作るのが防潮堤だが、今回は違ふ。内陸側にひいたかたちで10m~20mのものをつくる。ひいた部分の防潮堤の漁業への影響は不明。内陸側の方が見た目がひくくなつて圧迫感が少なくなるように配慮している。今のところは漁業への調査していない。やつと合意を得て計画を立て始めたところで、環境アセスメントはまだ。

③ 地元新聞の記事によると、高台移転・公営住宅への移転開始は早くても平成27年頃と伺っています。(実際、仮設住宅、みなし仮設に関して、宮城県では1年間更新することを聞きました。)しかし、土地区画整理事業などの遅れから、さらに遅れる可能性は否定できません。この点への対応(予定)について教えてください。

(回答)

27年度中に終るものもあればそうでないものも。住民の合意ができたところから発注するし、規模が小さいものはほとんど完成しているものもある。遅れているかと言われれば、他と比べて遅れているように見えるものもある。しかし進め方が違ふ。

仙台近郊の名取では、地元のコミュニケーションではなく、「ココに作るから入りたい人は来て」としている(市誘導型)。一方田舎では、小さいのをたくさん作っている。そこに住んでいる方のコミュニケーションを大切にしたいから(協議会型)。気仙沼は両方。1市2町が合併してできたもの。二つの方法を同時に進めているが、6割か7割くらいは発注終つていて、残りは今年中に発注が終る予定。行程よりも早く完成している状況。鹿折と南気仙は土を入れている。事業の決定まで1年かかっている。一般的には、阪神淡路と同等か少し速いスピード。盛り土工事の土の目処はたっている。

これから災害復興住宅の建設が始まる。一括発注、ゼネコンが設計から施工までまとめて行う方式を取り、効率化を図っている。気仙沼港では施工する区域は決定しているが事業化の手続きにかかっている今年度中には決定する。当初の計画より遅れ気味で、5年間伸ばした。区画整理の中でも同時進行。ハコモノを建てるのと周囲の造成を同時に進めている。

(回答を受けての質問1)

施設を造つたが、全部埋まらずに余つたというケースはあるのか

(再回答)

市誘導型だと応募と建設戸数があつていないことはある。応募が多いところは建設戸数を増やすということをしているが100%希望通りにはいかぬ(気仙沼は平地が少ないし、広いところは住めなくなるところも多いため)。

市で一番高い10階位の建物が、災害復興住宅になるというのは目に見えている。

気仙沼のどこに住んでいるかによって就職口に困るということはない。

(回答を受けての質問2)

住民の話聞きながら進めるうえで苦勞などがあれば教えてください

(再回答)

我々は一人一人住民の声を聞く機会が多い。説明会、意見交換会、個別相談もやっている。市誘導型はそういうものを省きがち。市長のポリシーが住民の意見を聞けということなので、周囲から復興遅れていると言われていたが、「モノをつくっていく前の段階」が過ぎれば後は早いはず…!

住民の方々もどこに住むかは迷っていて、災害公営住宅や自主再建の申請や色々なところに同時に応募しているが、そうすると造りすぎてしまう。住民について個人個人のカルテ作っていて、制度上のダブリが減らそうと事業者と共有するようにしている。先祖代々住んでいたのでも住みたいという方もいらっしゃる。安全な場所に移転してもらうのが基本。例外的に危険区域内でも寝室が何メートル以上の高さにあるとか、頑丈にできているかなどの基準を満たせばOKとしている。

(回答を受けての質問3)

説得の仕方はどうするのか??

(再回答)

危険区域の中でも移転を望まず自立再建を目指している方もいる。土地があるのに有効に使わないでいいのか、工場を建てたりしたいし、そのために防潮堤造りたいというしかない。同意書は100%ではない。8割、9割くらい。原動率(?)が10%以下の計画はなかなかないから、それをわかってほしい

(回答を受けての質問4)

危険区域とは気仙沼のどれくらいの広さなのか?

(再回答)

他の地域では津波浸水1メートルで認定しているが、気仙沼では0センチでも災害危険区域として認定している。家屋の被災割合が40.8%、被災事業所数は80.7%だった(資料参照)。津波ゼロの町を目指しているから、これだけ徹底している。

④ 防潮堤計画を代表とする、「ハード面の防災」が強調されがちですが、防災教育を代表とする、「ソフト面の防災」の重要性も再認識されていると思います。気仙沼がこれまで取り組んできた、また、今後取り組んでいく「ソフト面の防災」について教えてください。

(回答)

地域の防災意識の向上のための研修会を毎年40回以上開催している。また幼年者向けにも防災教育を開催している。

⑤ 自治体の規模やニュースでの注目度によって、支援金が行き渡らず、被災地間でも差が生まれていると聞いています。気仙沼は比較的町の規模も大きく、支援物資や義捐金なども多く集まったのではと推測するのですが、周辺の地域で非常に復興が遅れていて気仙沼以上に問題を抱えている地域はありますか?もしあればどのような問題か、教えてください。逆に、気仙沼の方が他地域よりも遅れている課題などあれば、伺いたいです。

(回答)

他の地域の状況には詳しくわからないので答えられない。

⑥ 復興に向かって歩む気仙沼の姿を見てもらおうという思いのもとで観光政策を行っていると思いますが、「観光政策」の現状を知りたいです。(「観光特区」との関連を含む)もし何か問題・課題(たとえば、人があまり来てくれない、地域住民の雇用にうまく結びついていない、など)があればそれも併せてお願いします

(回答)

観光戦略会議をやっている。具体的な戦略と広報など

1. オンリーワンコンテンツ(食ブランドなど)の拡充

2. 水産業と観光の連携による観光総合サービスの創出

(その他、関係者の集まるプラットフォームづくりなども既に行っている。)

加えて、税制上の特例を受けられる地域がある。

気仙沼市は中心となる観光資源の特定ができていないので今後重要。水産業を中心とした資源と観光資源との融合を目指してゆく。(詳しくは市役所HP)

⑦ 上記と関連して、地元の高校生が気仙沼を観光面から応援する活動が行われています。(ex. 底上げ Youth) 将来の気仙沼を支える若者との連携・支援についての現状・可能性について教えてください

(回答)

「受け入れ態勢の強化」戦略のなかで、若年層やNPOなどと協力していく予定。

(詳しくは市役所HP)

⑧ 日本国内向けのみならず、海外に向かって観光に関する具体的な発信を行っていますか？もしくは行う予定はありますか。

(回答)

海外向けの発信…JR 仙台駅などでパンフレットおいている、また**気仙沼市役所の facebook** ページも(配布資料)。

(回答を受けての質問)

三陸復興国立公園が設置されるが景観を活かしたプロジェクトなどはないのか。

(再回答)

自然環境と、交通アクセス…ある程度便利にしないと、興味を持たせるのが難しい。観光客も守らないといけない。関東以北で最大規模の橋を建造予定、復興の中心として、そこに観光客を招致。

震災時、国道 45 号がだめになったが、三陸沿岸自動車道だけは無事で、物資が全て運んでこられたいわば「命の道」が気仙沼まで延長されるのと、それを大島への道をつなげる。たくさんの方がボランティアで来てもらっているが、リピーター戦略に注力(復興ファンクラブやホヤボーヤ…東北ではゆるキャラ 1 位)。震災の爪痕をどう残せるか、モノを残すのか、映像として残すのか。防災意識の醸成を図る。住民としては、実際様子は皆に知ってほしいし、助けてもらった感謝の気持ちや、成果を全国に知って欲しい。第十八共徳丸(震災津波で海岸から 500m 離れた鹿折駅前付近に打ち上げられた漁船、その際に多くの住宅等が押しつぶされた)は住民感情としては最悪。関東では共徳丸を見るツアーまであって、その期日まで解体しないでほしいと言われたほどだが。

⑨ 仮設住宅で暮らす方々(高齢者を含む)から行政・支援団体に対して、現在どのようなニーズがあるのでしょうか、また、それに対して、市役所ではどのような取り組みを行っていますか。

(回答)

街灯の設置、結露対策やとびら腐食防止。居住期間の長期化に伴い修繕。孤立化や引き籠り防止。高齢者への声かけ、話し合い、簡単な手伝い。世代間交流事業の推進。絆再生事業(生活支援相談員の設置による、高齢者や障害者、離職を余儀なくされた若年層の相談)有資格者をはじめとする人材の確保が難しい。

国の費用で行っている事業の継続と事業費の拡充が問題点。

⑩ (長期間) 仮設住宅に住むことによって生じるストレスへの対策(ストレスマネジメント)として何を行っていますか(何ができるのでしょうか)？

(回答)

健康調査、訪問相談窓口、情報相談員同士の意見交換など行っている。

⑪ 仮設住宅生活や、別の地域への移転を迫られるとなると、とりわけ若者の人口流出が加速しそうに思うのですが、現地の若年層を東北に留める/他地域から呼んでくるために、補助金のほかにどのような対策をされていますか。

(回答)

人口流出に対して、雇用の創出により食い止めたい。婚活事業の案もあがっているが具体的な方策や補助金などはない。

⑫ 貸与終了後の施設の活用、処分費用の負担等の課題に対しての、気仙沼市役所の対応策を教えてください。また、「本設」商店街への移設にあたっての土地整備上の課題と、気仙沼市役所の打開案があれば教えてください。

(回答)

仮設整備、貸与は5年をめど。払い下げや撤去を行う。撤去費用を事業者に求めたことはないし、今後もない。復興マルシェは当面の事業継続が図られるよう既に示している。自主的な取り組みに対しては、相談対応や説明会、補助制度の政策など震災直後から行っている。営利目的事業者への支援となると公平性が問題となる。側面支援や、主体性を持った意識対策が必要。誤った情報がメディアを通して流れているが、最大限の支援を行うようにしている。復興マルシェの人が誤った情報を流している。

### 第一次産業の復興状況

⑬ 日本の食料自給率が年々減ってきている中で、東北地方の1次産業（農業・漁業）は自給率維持に大きな役割を果たしていると思います。震災前と後で、耕作面積や収穫量、漁獲量などについて、どの程度の差があるのですか。どの程度まで回復してきているのでしょうか？

(回答)

24年水揚げ高、数量が震災前に加えて55,7%に。水揚げ高の回復が望まれる。周辺施設の整備も進めばより回復するのでは。

⑭ 石巻では「漁業特区」なるものが9月から実施されはじめています。賛否両論あると思いますが、気仙沼でも策定される可能性はあると思っています。実際のところ、行政としてはどのようにお考えでしょうか？

(回答)

施設の9割以上が復旧。特区は馴染まないと考えている。漁業従事者の主体的な復興が望ましいと考えている。魚市場の背後にそれを加工できる施設がたくさんあるから、気仙沼に魚が集積していた。それが復旧しないと水揚げも回復しない。魚はどんどんあがるが生のまま全部出荷すると、地元には儲けはない。加工して、全国に出荷することで初めて地元を潤せる。加工場の集積、大規模化によって処理能力の向上を図る。

⑮ (今後の汚染水問題によっては) 食品の安全性・風評被害についての問題が生じるかもしれませんが。この点について、どのような対応を考えていらっしゃるのでしょうか？

(回答)

危険値である100ベクレルを超えたことはない。全国の消費者に公表している。

⑯ 気仙沼市の避難所ではペットと避難して寝泊りされた方もいらっしゃったというニュースを見たのですが、その際にその方々からはこういった要望や声がありましたか。また、それ

に対して自治体として苦勞されたことや工夫されたことを教えてください。気仙沼市の避難所ではペットと避難して寝泊りされた方もいらっしゃったというニュースを見たのですが、その際にその方々からはどういった要望や声がありましたか。また、それに対して自治体として苦勞されたことや工夫されたことを教えてください。

(回答)

当時やっていたのは、巡回して、一時預かりのボランティア、里親への譲渡や飼い犬への返還。負傷したペットや帰還が困難なペットの収容。一般の避難施設に連れ込まないことを条件に最大15頭までは認める。トラブルになって避難所をかえたことも(中心になっていた人が移ると糞の始末などが疎かになったり)。アレルギーなどから区別している。移ってほしい施設にスペースやドッグフードも用意。ペットを飼える施設をすぐ近くに用意したのに拒否されたりして困った。飼い主の責任により同行を許可する。地域によって異なるので把握しきれず。業者に預かってもらうなどした。

⑰ ペットと同行避難された方に対して、他の避難している方とのトラブルや苦情といったものはありましたか。もしあったなら、今後にむけてなにか対策はありますか。

(回答)

メディアで取材されたが放送されなかった!!(激怒) 後手に回ったのは確か。人命を優先させペットまで手が回らなかった。避難所だとイライラもたまりやすく鳴き声への苦情も。ペット用品を手に入れることも難しかった。

⑱現在、気仙沼市はボランティアの数は足りているのでしょうか。いま一番足りていない支援は何でしょうか?

(回答)

8月には1200人のボランティア受け入れ。昨年の10月と同様程度。人数的には継続的に来て頂いている。瓦礫撤去のようなわかりやすいものは減ってきて、個別具体的な内容に変化してきている。公園や海岸の清掃、あるいは特定地域のニーズにこたえる。

⑲震災時、障害者の方々に対して、特別に対策をとっていましたか?特に、知的障害者の方は、避難所といういつもと違う環境ではパニックに陥ったり、不安にかられたりしてしまうと思います。そういった方々も、健常者の方々と同じ仮設住宅に今なお、暮らしているのでしょうか。

(回答)

民間賃貸住宅の借り上げによって利用していただいている。障害者用の施設を整備する、障害者の入居を優先するなどしている。

⑳和歌山県有田市では、アプリを利用した「サポーター制度」を導入し、特産のミカンをはじめとした、市のPR活動に力を入れています。実際、(台風12号の被害に対するボランティアのためなどで、)直接現地には来れなくとも、少しでも応援したいというユーザーを、「ダウンロード」という形で取り込んでいます。気仙沼市にも、水産物、ホヤぼーや、観光資源、津波体験と防災、など魅力あるものがたくさんあります。中長期的な震災復興を成し遂げるためにも、情報を発信していく制度、関心ある人にサポートしてもらう制度、を導入してみたいかがありますか?

(回答)

入会者3500人。メールマガジンや震災体験館の入場料割引、ストラッププレゼントを行っている。

21 政府や県の指示・政策が市の現状をうまく反映していなかったり、あるいは権限が重複して非効率になっていたりということはありますか？例えば復興交付金の支給額や用途の制限について対立があると聞いたことがあるのですが、その他具体的な政策に関しても中央省庁などに対して不満や改善点などもし感じることがあれば教えてください。

(回答)

要望の提出は続けている。

- 交付金  
公園整備したいが、避難場所としてなら補助金良いと言われたとか、補助金期限延長してほしいとか。(以前に比べれば理解してもらえるように。以前は話がかみ合わなかった。必ずしもハードルが低くなったわけではない。)
- 避難経路の整備  
国は全部徒歩での避難としているが、徒歩で高台にいけないという場合が多い。高齢化も進んでいる。車が通れる最低限の4メートルの幅にして欲しいといっても、2メートル分の整備しか認めてもらえない。何度も話し合い。
- 危険区域の買い上げ宅地の集約  
危険区域となる被災跡地の宅地部分を買ってほしいという要望はある。使わないのに市の土地が増えるのは良くない。震災前に建物が建っていた場所だけを買って取れる仕組みになっているが、点在していた宅地部分だけを買って取っても意味がないので農地と宅地をかえて集約したいが、国の政策ではだめ。勝手に交換したり売ったりしてはいけないことになっている。賃貸まではOKだが、復興した後の市のものすごい財政負担になるのは自明。(工場がもともと建っていただけある魅力的な場所なので、土地を集約できれば買い手はたくさんいる。)
- 障害者への他地域へのヘルパー派遣  
震災当時からあった。医師や看護師より人数は少なかったが、医師、薬剤師、看護師などはセットで来てもらっていた。看護協会という全国組織からの派遣も、震災直後からあった。そのひとつのついでで全国からヘルパーさん呼んで頂いた。点在していた障害者を集めて世話することから始まった。夜に声を出す方もいらっしやっただけで、避難所の道具室を改装して個室用意したり、別の施設に定員オーバーだが特別に受け入れてもらった(家族も疲弊しているの)

(回答を受けての質問1)

これから津波が起こりそうな地域あるが、気仙沼から他地域への働きかけを行っているか？

(再回答)

職員に講演会の依頼はよくある。東京都23区の職員研修で講演とグループ討議に呼ばれて説明や反省の共有をやっているが、組織的にはしていない。高知県のある地域の防災計画策定のアドバイザーになったり。被災地に来たことを覚えていてネットで見たら再び訪れたりして欲しい。それが市民や職員の心の支えにもなる。気仙沼の商品が売っていたら買ってほしい。

(回答を受けての質問2)

お話を伺っていて、マスメディアによる偏向報道や風評被害に悩まされているような印象を受けたが、何か対策はとっていないのですか。

(再回答)

もちろん事実誤認があればすぐに抗議や訂正を求める文書など送ったりしている。しかし実際にお詫びすることがなかったり、しても翌日だったりなどということが多い。我々が最も困っているのはメディアの偏向報道ではなく、それを真に受けた市民からの抗議。役所の説明と違う内容をメディアが流すと、どちらも正しいと感じた多くの市民が説明を求めてきて、その対応が大変。

(回答を受けての質問3)

メディアを通すのではなく、UstreamやYouTubeを通して実況解説をしたり、直接住民との対話を心掛けたりすればよいのではないかと。あるいはtwitterを通してこまめに情報発信すれば若者はその情報をよく見ると思うが。

(再回答)

かつて似たようなことを検討したことがあったが我々市役所にはそれらをできる職員がいない。良い案だと思うので検討はする。

## (2-4) 馬場国昭氏の講演 担当

(開催：9月25日夜 宿舎にて)

馬場国昭氏：震災被害者で現在は唐桑地区仮設住宅に住みながら、カエル塾を主催しボランティア受け入れなどの活動をされている。

### ● 映像(約40分間)

(震災直後の映像)

気仙沼は避難指示、警報の発令が全て後手後手にまわった。気仙沼の行政無線での連絡が遅かったのは、防災センターが山の上にあったから。南三陸町では海の横に防災センターがあったから職員が犠牲になってしまったが避難指示は早かった。中央公民館の屋上に400人近い人が非難した。寒さと火事と余震に見舞われた中で二日間そのまま過ごした。ライフラインはとまったのに午後六時のチャイムは流れていた。約二時間半で気仙沼は壊滅した。亡くなった人たちの海からの叫びでは？と言われた。

(翌日の気仙沼の映像)

学校側から高台に車が登ろうとして市民会館や体育館を目指したが、非常に狭い道路で、一台のタクシーが下りてきて離合出来なくなったので数十台の車が立ち往生したまま亡くなった。車で避難するべきではないが高齢者がいたらそうもいかない。陸前高田は90%が街が消滅し三人一人が犠牲に。唐桑町でも百人が犠牲になったと言われている

(唐桑半島の映像)

セブンイレブンの近くの浜にて  
命の次に大事な船がなくなるのがつらいと漁師が口ぐちに言っていた。

### ● 馬場氏のお話

3月24日にFIWというハンセン病関係のボランティアが最初に入ってきた。自分の復興のスタートを切った。誰がどこに逃げたか、どうなったかと言っていただけだったのが変わった。柳田國男が三陸沿岸の復興が「旅人たちによって満たされた」という言葉を残す。明治から復興は旅人からなされた。今で言うボランティア。雪国の春という柳田國男の本を読んでほしい。その紀行文の中で三陸の本の中に載っているのを読んでほしい。家族が流されたら養子に入って、ということも旅人によってなされた。ただし残念ながら同じ繰り返しで、漁民はみな海の近くに家を建てたいという思いがある。

ただ震災当時は寒かった、という記憶しかない。震災の一ヶ月後にやっと立ち直った。思い浮かべようとすると小説になってしまう。震災から二十日目にして息子と瓦礫の中を歩き社員の家族を探す。「あたかも羊羹のような津波だった。」

家と共に流されていく子供や年寄りが窓から手を振りながら助けて助けてと叫び、見ている側は頑張れ頑張れと叫ぶしかなかった。救援物資のなかにお菓子があったから先祖の墓に参って礼をのべた。百年復興がかかるだろうと思われた。しかしその後ボランティアに励まされながら復

旧のスタートをきった。私自身笑顔に救われた。笑顔の無かった土地に笑顔を与えてくれたのはボランティアのおかげ。旅人（ボランティア）との一瞬の出会いから生まれる「笑顔」。

ひまわりの種をお願いしますと呼びかけたら、全国の方からお便りを頂いた。それまでの過程で「花」に救われた。

また、「音楽」にも救われた。仮設住宅の会長を引き受けたが、そのとき広場で沖縄民謡が聞こえてきた。皆が興味を持って部屋からでてきて、少しずつコミュニケーションをとれるようになった。今では自分の仮設住宅が最も連帯が強い。見返りを受けるようなボランティアは一生しなくてもいい。「復興の自慢話をできるか」と現地のひとに怒られたひとがいるが、それは自分自身へのいらだちで言ったのであって、ボランティアの学生にむけて言ったわけではない。

(質疑応答)

#### ①仮設住宅の方が困っていること、して欲しがっているものはありますか？

仮設住宅では困っているものはない。エアコンも入っているし物的に不便はない。瓦礫の撤去など外面的な支援を行っていたのに対し、今度からは内面的な支援が必要。だんだんと人が来なくなることに対する寂しさを仮設住宅のおばあちゃんたちは抱えている。「これからは目的を持ってこないでくれ。」遊びとして来てほしい。旅人として来てほしい。ちょっと立ち寄ってみたよ、というくらいのブラっとした気持ちできて、気軽に話をしてほしい。数多くのいろいろな人たちと繋がりを持って行きたいというのが仮設住宅に住む人たちの願い。マッチ箱のようなところに5年も6年もいて耐えられるだろうか。人と人とを繋げる手助けをしてほしい。

#### ②一番変わったことは何ですか

一番変わったところは沿岸漁業は衰退した。平成の合併で行政が一つになったことによって、震災後吸収されたところには心のこもった復旧が入っていない。旧市内のことがメインで取り上げられていて、唐桑町や本吉町では復旧はおおざなりにされている。四億の共同募金が入ったのに、南三陸町二万人、気仙沼七万人とすると1:3になる。独立していたら南三陸町のように比率配分されたはずなのに、旧市街だけでとられて唐桑町にまわってこない。人口も少し減っている。中学卒業して1/3は遠洋漁業の漁師になるのだが、沿岸漁業で稼働しているのは1/5ほど。カキの養殖も3軒ほどで地場産業は衰退していこう。

#### ③関西は遠いからなかなか東北に来られるわけではないがどうすればよいか。

風化させないでくれとか語り継いでくれとは言わない。記憶が風化するのは仕方のないことから。ニュースで報道されたときに、思い出してほしい。目的持ってきたら、うまく予定がいかなくなったら残念な気持ちになる。そういうのはやめて、目的を持たずにただ東北に来てほしい。

「震災ありがとう」この言葉にたどりつくまでに2年半かかった。失った過去と失った友達は二度と戻らない。いくら振り返っても戻ってこないが、ならば私自身が「本当の芸術というものは人間の破壊と自然の破壊の無の中から生まれる。」という言葉があるが、新しい人生、一つの自分の芸術作品を作っていくしかないだろう。そうでなければ前には進めない。そして、それは旅人の支えが必要。震災があったからこそこういう出会いがあった。被災された方もおそらくは、そう思っているはず。

#### ④震災で失ったものは戻らないので新しい気仙沼や新しい東北を造るにあたってどうするのですか？今までと違って変わるべきものは何ですか？

政治と宗教には触れないが、もし末端の中でどのように変わるかと言われれば人と人の付き合い方を変えなければならない。というのも、震災等の極限状況に陥った時、人の真の姿が見え

隠れしてしまうから。

座右の銘「報恩感謝…支えて下さった感謝を次に会ったときにしたい。元気に頑張っている姿を見せたい。」「一輪咲いて咲き増える」宮本先生がひとつの花であるならばそこから皆さんの出会いがあった。季節季節に手紙を書いている。もし思い起こして書こうとすると小説になるから。

「眦を裂く」あらゆる困難をもはねのけるために決意する。三陸海岸は陸奥・陸中・陸前の三つに接するというのが語源。欲しいのは絵はがき。

(参考)

- ・有志 8 名で、12 月初旬に再訪し、カエル塾にて、カモメネットで収穫した野菜を使った鍋パーティーを行った。

## (2-5) 水山養殖場 (養殖作業・森のお手入れ) 担当

“The sea is longing for the forest, the forest is longing for the sea.”

(畠山重篤さんがつけられた森は海の恋人の英訳)

### ◆目的

「森は海の恋人」運動発祥の地で、森と海の両方での作業を行うことで、両者のつながり、また、牡蠣の養殖業に命を懸ける人の思いを理解する。

### ◆活動場所

午前：室根山 (ひこばえの森)

6 月の森は海の恋人主催植樹祭で苗木を植えた場所の雑草の刈り払い

午後：水山養殖場

牡蠣の分別、畠山氏の講義

### ◆準備物

長靴、軍手、ゼッケン (以上はフィールド研より貸与)

刈り払い用の鎌 (現地の方から一人 1 本貸与)

汚れてもいい服 (バラ科の植物もあるため、長袖・長ズボンが良い。)

お弁当 (気仙沼給食センターに幕の内弁当 500 円を注文)

### ◆お世話になった現地の方

午前：ミウラ氏 (第 12 地区自治会長)、オヤマ氏、オノデラ氏

午後：畠山氏の奥様

一日を通して：畠山重篤氏

龍村仁氏 (「ガイアシンフォニー」の監督。) その他撮影スタッフの方

### ◆1 日の流れ 9 月 26 日 (木) 8:00 からくわ荘出発 (大上観光のマイクロバス)

9:00 ひこばえの森交流センター 着 トイレ

お世話になる方々からご挨拶

ミウラ氏 (第 12 地区自治会長)・オヤマ氏・オノデラ氏

畠山氏⇒畠山氏は一旦離れる。10 時過ぎあたりに合流。

9:15 作業場所へ移動 (バス)

刈り払い用の鎌を一人 1 本借りる

作業の簡単な説明

9:30 作業開始

散り散りになって雑草を刈る

植樹した木々には目印が立ててあるが、植樹したものと雑草の区別が難しい。⇒事前に植樹されているものの見た目等を学習しておくことが必要である。

傾斜のきつい斜面である上、なかなかの草の生えっぷりである。

途中、徳地教授と牛田事務長補佐が所要で帰る。(気仙沼駅で鈴木先生と引率を交替・引継ぎ)

- 10:30 作業終了 作業場所で写真撮影  
下山 (バス)  
ひこばえの森交流センターに戻る トイレ  
お世話になった方々にお礼⇒午前の森での作業と午後の海での作業  
担当者が異なるのでお土産は2つ用意しておく。今回は1つだけしか用意していなかった  
ので海での作業時に畠山氏に渡しました。
- 11:00 出発
- 11:50 水山養殖場 到着  
弁当をいただく 休憩
- 12:45 作業場所へ移動 (2組に分かれボートで対岸の作業小屋に移動)
- 13:00 作業開始  
水揚げされたばかりの牡蠣の分別  
大きいもの・小さいもの・殻のあいてしまったものの3つに  
牡蠣に交じってカニ、ホヤ、小型魚類などもおり、楽しい。  
⇒担当の漁師の方が黙々と作業し、学生が学生同士でワイワイ楽しんでいたというイメージな  
ので、積極的に話しかけて牡蠣を含めた生き物などの知識を教えてもらってもよかったと感  
じる。
- 14:00 作業終了  
ボートで移動  
取れたてのホタテ・牡蠣をいただく！  
たくさん剥いてくれたので、量・質共に大満足でした。  
「味覚はなかなか忘れない」
- 15:00 畠山重篤氏の青空教室開催
- 16:00 終了 写真撮影をしてバスへ

#### ◆青空教室 (内容)

植林活動は25年前に始めた。

「森里海連環学」の創始者は京大の田中 克 (たなかまさる) 名誉教授。

ヒラメ・カレイの研究をされていた。ヒラメの卵は沖ら一度砂浜へ戻ってくる。そのため、砂浜がテトラポットやコンクリだらけであったり、砂浜を作る上流の川・山の環境が悪かったりすると、いいヒラメが取れない。特に、里に住む人々の影響が大きい。よって縦割りではなく流域全体を保全するため、フィールド科学を立ち上げた。立ち上げに当たり、森里海全体を俯瞰する人物が先生として必要である、とのことから10年前に林業・水産業の教授陣が畠山氏を訪ねてきた。現場を知っていること、独学でも勉強されていること、また、たまたま講演予定だった外国の教授が急遽キャンセルにより畠山氏が基調講演を引き受け、尾池総長 (当時) のバックアップもあり、教授として就任した。

津波の直後は魚・鳥が全くおらず、海が死んだ、と思った (「沈黙の海」)

牡蠣の餌となるプランクトンすらいなくなってしまったのではないかと危惧したが2011年5月、フィールド研 (舞鶴水産実験所) の益田准教授が訪ねてきた際、水中のプランクトンの量を見てもらった。「牡蠣が食べきれない量のプランクトンがいます！」

人々の環境に対する意識が変化してきた結果。※牡蠣は1日200Lの水を吸い、水中のプランクトンをえらで濾す。そのためエサを与える必要がない。サケ・ウナギなどは川の美しさの指標となり、震災後は一時期減ったが最近増えた。

川がきれいになった証拠だと思う。

お盆ごろにはがれきの撤去も終わり、杉でいかだを作り、養殖業を再開した。通常、1つの牡蠣が大きくなるのに2年にかかるが、半年で大きくなった。

「そりゃ食べきれない量のプランクトンがいるんだもの！」

国連森林フォーラム(UNFF)よりフォレストヒーローとして表彰された。漁師なのにいいのか?と思ったが、海の森・陸の森、どちらも大事にしていることから。

**\*以下、森里海の生態系と「鉄」の関係性についてのお話が続く。かなり理系寄りの話であったと思う。**

三陸海岸沖がどうして絶好の漁場となっているのか。教科書には親潮と黒潮がぶつかって潮目ができているからと書いてあるが、「これが落とし穴だよね！」by 畠山氏。確かにそれも関係があるが、主要な要因は別にある。水は4℃で最大密度を持つため、親潮が運ぶ温度の低い水は海の下の方に沈んでいく。一方、黒潮が運ぶ温度の高い水は海面に上がってくる。これにより、深層大循環と言われる海流の大循環が発生する。深層大循環によって海底にたくさん存在する鉄の酸化物(地球は鉄の惑星と言っていいほど内部は鉄で満たされている上、三陸沖には鉄分を多く含んだ黄砂が飛んでくる。ただし、酸化物の形なので粒子が大きく海底に沈んでしまう。)が巻き上げられて海面に現れてくる。植物が光合成をするために必要な、緑色の色素をもつクロロフィルを合成するためにも鉄が必要だし、植物の栄養分であるリンや窒素を吸収する際に鉄が必要となる。

しかし、20数年前にアメリカの学者マーチンが初めて海水の鉄分濃度を測定し(それまでは測定の道具としてガラスケースを使っていたが海水の鉄分濃度があまりに小さいためにガラスケースのガラス成分に含まれる鉄成分が溶け出て影響を与えてしまうため正確に測定できなかった。マーチンはプラスチックケースを用いたという。)、結果的に海は極度の貧血状態であることが判明。深層大循環よりも大きな鉄分供給機構があることが分かった。

三陸海岸沖が絶好の漁場になっている理由を考えると、森の木々の葉が腐葉土になるときに作られるフルボ酸がキーとなってくる。フルボ酸が鉄イオンをキレートという形でキャッチする。それが雨や川の水で海に運ばれる。フルボ酸は海面に浮かび上がってくるらしく、植物プランクトン(珪藻類)はフルボ酸の鉄イオンを使って増えていく。さらに植物プランクトンを食べる牡蠣やホタテ等の貝類やその他の魚類が増えていく。実際に、鉄イオンをキレートしたフルボ酸をたくさん含んだ海水が北のロシアの方からブツソル海峡を通過してオホーツク海や三陸海岸沖注ぎ込んでいるという。これにより、森里海が一つにつながり、森は海の恋人であることがはっきりした。これが、三陸海岸沖が絶好の漁場になっている大きな理由であるという。

また、以下のような小話も聞かせていただいた。

日本海近海でクラゲが大量発生している理由  
中国のサンシャダムにより長江から外海に大量に運ばれていた土砂がせき止められてしまい、海に珪素の供給量が少なくなってしまった。そのため、植物プランクトンなどの珪藻類の細胞を包む珪酸質の物質を作れなくなって、代わりに藻類が大量発生した。この藻類はクラゲの大好物であるためクラゲが大量に発生することになった。

フルボ酸の放射能の除染効果

フルボ酸には除染効果があるらしい。真偽のほどはまだ不明。以下のリンクを参照。前者が肯定派、後者が懐疑派。

<http://fulvicrich.p-kit.com/page180987.html>

<http://radi-info.com/q-1451/index.html>

◆反省点

- 山の植物の知識が不足していた。  
どれを刈っていいのかわからない。
  - 牡蠣をさわる作業はゴム手袋が欲しかった。  
水や泥が軍手にしみてくる
  - 山でお世話になった方にも別でお土産を用意しておけばよかった。
  - ボートで2回にわけて作業場所へ移動したが  
第2便が到着したことには第1便のメンバーが説明を受け終わっており  
後から来た人は何をしたいのかわからなかった。
  - 畠山氏の講演を録音しておけばよかった。
- \* 畠山重篤氏の著書である「牡蠣礼賛」の知識があると、後半の畠山氏のお話をさらに面白く聞くことができるかもしれない。

- 水山養殖場並びに畠山重篤氏との日程調整の経緯とノウハウ

水山養殖場でカキ養殖の作業をしたい、というのが学生側の希望であったが、「森は海の恋人」運動（詳細は第5回しおりにあります）をより深く理解するために、担当の班が山での作業にも時間を割いてもらえるかを要望として追加してアプローチした。

<1 通目>

まず、今回で5回目を迎える京都大学復興支援学生ボランティアの設立経緯を事細かに書いた。（僕らのことをより知ってもらうため）そして、第4回の活動のお礼と第5回でも同様な活動をしたいという要望を具体的な日時を指定して(ex:9/25-27のどれかの1日で午前が9:00-12:00、午後が13:00-16:00) お願いした。また、最後にもし可能であればの添え書きをいれつつ、山での作業を「森は海の恋人」運動のより深い理解のために多くの学生が希望しているという形で追加の要望をした。以上、一通目はこのボランティアの設立経緯と前回同様の作業をできるかのお願い、そして今回は学生の要望が多いという形で山での作業も追加したいという希望の3点を書いてFAXを送った。ちなみにこちら側の情報として、自分の名前と所属、携帯電話番号、FAX番号をFAX送信状に書いて送った。

\* 先方も忙しいようで、FAXの返信は平均して3-4日後になる。したがって連絡担当の学生の忙しさと先方の予定を考えると1か月以上前から連絡を取り合う方がよい。また、水山養殖場で対応しているのは畠山氏の息子さんである信（まこと）氏であった。

<1 通目の返信>

設立経緯に関するコメントはなかったが、絶対に無いよりはましなはず。前回同様の作業をしたいという要望は具体的に日時の範囲を指定していたためにすぐに26日と決定し、作業時間も受け入れてくれた。ただし、この時点では森とはどこを指し、どういう作業をするのかはまだ未定。そして決められた午前と午後の時間をどのように配分するかも未定であった。

<2 通目>

一通目の要望に対する対応への感謝と当日の作業の際に京都大学の側で用意しておくべきものの確認をした。このとき、この時点では森とはどこを指し、どういう作業をするのかということは失念したままであり、決められた午前と午後の時間をどのように配分するかについては前回の活動内容を聞いて、先方にお任せする形でよいと考え方を変えた。

〈2 通目への返信〉

軍手と長靴の用意をしてほしいとのこと。すぐに京都大学の方に連絡を入れた。

〈3 通目〉

最終確認として、**森での具体的な作業内容と場所**についてお伺いした。この場所の情報は大型バスとマイクロバスのピストン輸送のスケジュールを立てるのに必要である。

\*この FAX への返信が 3-4 日以上たっても返信が来なくて、再度同じ内容ものを送っても返信がなかった。最終手段として水山養殖場の電話番号を調べて（もっと早くにすればよかった）電話したら、担当の女の人が出て信氏が帰ってきたらすぐに返信するよう言いますとって一件落着と思ったが、この FAX に対する返信がなくて、FAX が来たら連絡するよう親に言ってから（小西は自宅生なので）ボランティアに出発した。

活動日（26 日）の一日前の朝に、畠山重篤氏から僕の携帯電話に直接連絡があり、電話越しに**最終スケジュール調整**をしようとしたが、すぐに決まるものではなかったため、畠山氏が夜に僕たちが泊まっているからくわ荘に来て**打ち合わせ**をすることとなった。すごくありがたかったです。位置合わせの最初に、室根山で開催された 6 月の植樹祭で植樹した木々の周囲の雑草刈りのお手伝いが山の作業であること、当日の午前と午後の使い方について重篤氏から報告があった。それを聞いてすぐに先生方がマイクロバスの手配をしていた。こういうどたばたにならないように連絡をとりあうべきだったと反省。その後は、重篤氏と重篤氏の著書の内容や養殖場の話などをして楽しんだ後、解散となった。当日は、9 時に室根山に着く予定だったが、少し遅れたため携帯に連絡が来ていた。それ以降は先方の方々に任せしていたら、楽しい作業ができた。

\*以上が学生と水山養殖場との連絡の経緯である。次回の活動の参考にしてください。

\*第 4 回は重篤氏でなく、息子の信氏が当日の担当でもあったのだが、今回は重篤氏が当日の作業の担当になってくれていた。また、第 4 回ではなかったらしいカキとホタテも試食もさせてもらった。このような素晴らしいサービスをしてくださるようにならな理由はわからないが、感謝と尊敬を忘れずに密に連絡を取り合うことで、学生側が水山養殖場での活動を楽しみにしているということが先方に伝わると思うので、それだけでも気持ちのいい活動ができるはずである。水山養殖場に限らず様々な所においてお願いなどするときは、このボランティアメンバーだけでなく、京都大学を代表しているという意識をもって対応をすること。

## （2-6）気仙沼大島観光 担当

### ① はじめに

第 5 回京大学生ボランティア（実質労働：9 月 24 日～27 日）において、9 月 25 日（水）午後 15:00 に気仙沼大島見学を実施した。引継ぎの参考にしってもらうため、その内容と利点・欠点及び感想をまとめる。

### ② 気仙沼大島見学決定までの流れ

大島見学の優先度は基本的に低く、取材班や仮設住宅班の埋め合わせを行うためのプランであった。今回は、仮設住宅での活動を 9 月 25 日（水）の午後に入れる予定であったが、都合がとれなかったため大島見学を行うこととなった。

### ③ 活動内容

気仙沼大島には「気仙沼大島観光協会」というものがあり、事前に予約すれば様々な体験や活動を行うことが可能である。しかし、大島にフェリーで大型バスを連れていけないことと、今回は直前の大島見学決定であったため、それらの体験システムを活用しないことにした。その代わりに、観光協会に置いてある全12台の電動付き自転車を利用し、参加人数24人を自転車班3つ(4×3=12人)と歩行班3つ(4人×3=12人)の計6班に分けて、くじ引きで班を決定し、「自由行動」をとってもらうことにした。(男女比は考慮した。)各班のリーダーは6人の見学班員とした。

大島見学の唯一のルールとして、各班に1つずつ異なる「チェックポイント」を設定し、初めにその場所に行ってもらったことにした。チェックポイントは、自転車班：龍舞崎・小田の浜・十八鳴浜、歩行班：亀山展望台・田中浜・久須志神社である。距離に応じてチェックポイントの行動方法を指定している。また、大島見学終了後、班ごとに行動の記録と班員それぞれの感想をまとめて提出してもらった。

### ④ 結果

全員無事に帰りの時間にフェリー乗り場に集合することができた。ただし、いくつか予定外の出来事があった。

- (a) 亀山展望台へ続くリフトが震災の影響で取り壊していたこと
- (b) 十八鳴浜への道が通行止めであったこと
- (c) 久須志神社(らしきものは発見?)が特定できなかったこと
- (d) 1つの歩行班が電動付きでない自転車を借りて行動したこと

(b)に関しては、チェックポイントを諦めて行動してもらい、(a)においては、歩行にてチェックポイントを目指して無事に展望台までたどり着いた。(d)については、電動付きでない自転車にて最も遠い龍舞崎まで行ったようである。

### ⑤ 感想まとめ

大島見学終了後、1人1人それぞれに感想を書いてもらった。全ては掲載できないので、一部抜粋する形で掲載する。

- ・亀山展望台からの景色は、遠くの舞根湾まで見渡せて素晴らしかった。
- ・津波による被害と、市街地に比べた復興の遅さが目に留まった。
- ・自転車があれば、どのチェックポイントも地図で確認したよりも近く感じた。
- ・大島の被災状況はあまり知らなかったもので、仮設住宅があることに驚いた。

- ・浜で死んだウミガメを見つけたが、助けられなかったのが心残り。
- ・徒歩だからこそその人との関わりができて、すごく良い経験になった。
- ・アップダウンが割と激しいので、電動でない自転車だと龍舞崎までの道がきつい。
- ・電動でない自転車で龍舞崎に行くことになり、体力的にきつかった。
- ・他の活動でも同じ人が多く、変わり映えがあまりなかったのが少し残念。

## ⑥ 反省点

今回の見学における反省点は、事前の情報収集不足によるものが多かった。特に3. (a) (c) のトラブルは全て情報収集不足によるものである。また、3. (d) のように歩行班のうち1班が電動付きでない自転車を借りて、最も遠い龍舞崎まで行くことは予想していなかった。体力的にきつかった人もいたようなので、歩行してもらうことを義務付けるべきであったかもしれない。

## ⑦ 総評

大島見学での大きな収穫は、「気仙沼市街地と比べた気仙沼雄島の復興の遅れを実際に見れたこと」と、「現地に住む人との自然の会話が生まれ、様々な情報が得られたこと」である。特に後者の方は、自転車を借りた班を除く歩行班が2班ともそのような出来事に遭遇し、嬉しい誤算であった。単に観光としての見学に加えて、そのような収穫もあり、各班から提出してもらった感想を見る限り、今回の大島見学は満足度が高かったと感じる。

また、今回の見学では天候に恵まれたことも成功の要因の一つであった。雨が降った場合のバックアッププランも用意していたが、今回のように屋外を自由行動する場合は、天気が悪くなった場合のことも必ず考えておく必要がある。

以上をまとめると、今回のように特定の地域を時間をかけて「自由行動」してもらう活動は、単なる観光の範疇を超えて、十分に成果が得られる可能性があるようだ。事前準備にかける時間があまりなかったため、多少場当たりに電動自転車班と歩行班に班分けし、班ごとにチェックポイントを与えて行動を分散させたが、これらも比較的うまくいったように感じる。ただし、反省点にもあるように、チェックポイントを設定する際の事前の情報収集は不可欠である。

馬場国昭氏が講演でおっしゃったように、これからのボランティア活動は「目的をもたないボランティア活動」も行う必要があるかもしれない。今までの活動が、予定通りの人と予定通りの活動を行うことがほとんどだったようであるが、例えば今回のように、思い切って時間をたくさ

んといった上で、「自由行動」してもらおうということは、予想しない現地の人との出会いが生まれ、新たな発見が得られる可能性を秘めている。ぜひ今後の活動の参考にしていただきたい。

### (3) 研究ボランティア各担当からの報告（活動内容報告・課題反省など）

公共政策大学院 2 年・太田充亮

#### 本ボランティアへの参加動機

東日本大震災以降、何らかの形で被災地の現場を訪れたいと想い続け、自分の進路が決まり落ち着いたところで、本ボランティアの活動を知りました。特に本ボランティアは、学生主体で内容を決めており、自分の専門と関連した内容ができることを知り、研究ボランティアとして参加したいと思うに至りました。

#### ・研究内容/日程

政府が主導する被災地の再生可能エネルギー普及プロジェクト「緑の分権改革」の調査を行いました。特に市の面積の約 7 割を森林が占める気仙沼市は、木質バイオマスの普及に力を入れています。私は、このプロジェクトの実施状況について、気仙沼市役所・産業部産業再生戦略課(2013/9/24、25)、気仙沼森林組合(2013/9/24)、気仙沼地域エネルギー株式会社(2013/9/25)の職員の方々にそれぞれヒアリングをさせていただきました。

#### ・研究の感想/考察

本プロジェクトの開始予定時期は、平成 25 年 12 月からであったので、訪問当時は試験段階にありましたが、全体として復興へ向けた可能性を体感しました。1つは、本プロジェクトがエネルギーの地産地消のみならず、地域経済の活性化にも重点を置いていることです。特に気仙沼市では、発電の原料となる間伐材の買取制度を設けて、現金と地域通貨の「reneria」で支払う仕組みを作っております。この地域通貨を発行することで、市の外にお金が流出せず、地域内で経済が循環するのだと思いました。2点目は、プロジェクトを実施する方々の熱意です。ボランティア全体を通してお世話になった気仙沼市役所の方はさることながら、発電の主体である地域エネルギー株式会社の職員の方の強い決意を感じました。再生可能エネルギーの普及事業は、太陽光や風力発電に関しては国内で成功事例はありますが、木質バイオマスは、これからの分野であると思われます。こうした状況の中で、本プロジェクトを成功モデルにするのだという熱意を感じ取ることができました。

#### ・研究ボランティア全体を通して

本研究ボランティアを通して、現場を訪れ体感することの重要性を再認識しました。特にヒアリングでは、インターネットや文献だけでは分からない、事業主体の方々の生の声を聞くことができました。また、中長期的な視野の必要性を体感しております。復興に関してはもちろんですが、本研究ボランティアの成果は今後の私自身にかかっていると思います。来年度から私は社会人になりますが、今回の経験を踏まえ、将来は仕事を通して被災地に貢献できるよう頑張りたく志します。最後に、本研究ボランティアでお世話になりました全ての方々にお礼申し上げます。

#### (4) 次回以降に向けたその他の課題・提案

第5回は、第4回までの活動を踏襲しながらも、現地を自分たちの目で実際に見て学ぶといった活動を多く取り入れました。参加メンバーの話し合いによって決めたことではありますが、「ボランティア」という趣旨からは少し離れている活動もいくつかありました。第6回派遣時には、東日本大震災から3年が経過しており、必要とされる「ボランティア」にも変化が表れてきているため、事前学習の意義がますます大きくなると思われます。また、第5回の活動を決めるにあたって、25名という大人数での活動が支障になることがあり、実際に仮設住宅の訪問を断念せざるを得ませんでした。いくつかのグループに分かれて活動できるようになれば活動の幅も大きく広がるものと思われます。第5回メンバーは、活動後も継続的にお世話になった方と連絡をとったり訪問したりしているので、第6回においてもそういった京都と東北をつなぐ良いきっかけになることを願っています。

#### (5) おわりに

京大ボランティアをきっかけとして初めて東北を訪れた参加者も多く、各活動を通してそれぞれが貴重な経験を積むことができました。これは、学部や学年を超えた学生が集まり、主体的に企画して行う本活動ならではのことだと考えます。このような「総合型」ボランティアの実施にご理解とご支援をくださっている京都大学ならびにフィールド科学教育研究センターに対して、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

## 5. 今後のボランティア活動に関する課題、留意点（フィールド研）

### （1） 学生による企画について

毎回学生が自主的に企画を行い、ボランティアの内容を決めているが、今回もその形を踏襲した。日々労働的なボランティアのニーズが減少している中で、電話連絡だけで、活動を決定していくのはなかなか大変であるようであった。しかし、班に分かれて、それぞれの学生が見知らぬ、しかも、相手は被災された方と真摯に交渉し、当日を迎えられた。これらは個々の学生に、大学では経験できない交渉やコミュニケーションのよい訓練になったと考えている。京都大学の伝統である自主独立を何歩も進めた経験ができたといえるだろう。

### （2） 今後の活動について

今回は被災地で研究を続けておられる防災研究所特定研究員の宮本匠氏より被災された馬場国昭氏をご紹介いただき、期間中に宿泊所であるからくわ荘にてお話を伺うことができた。馬場氏は津波の様子をおさめたDVDを示しながら、非常になまなましい被災時のお話を聞かせてくださった。その上で、それらを乗り越えつつある現状を、私はありがとう震災と思っていると表現され、ただ傍観者である我々には言葉もなかった。また、事前に活動調整ができなかった1日が結果的に気仙沼大島の視察になったが、こちらの日にも被災された方とお会いし、お話を伺うことができ、これまでのすべてが予定されていた活動とは大きく異なる経験をする事ができた。

実際ボランティアとして我々ができることには限界があり、復興がある程度進んでいる現状では、それらはますます少なくなっている。そのような中で、学生が現地へ行くことの意義もこれまでと大きく変わっていると考え。京都大学の学生は、現在そのような自覚はないとしても将来大きな責任ある立場に立つことが予想される。そのような指導的な立場に立つ人間形成を任されている中で、被災地を実際に体験し、現場の方のお話を伺う機会を与えられるというのは非常に有意義である。実際、一度被災地に行ってみたかったというレベルの学生が、その後、馬場氏に会いに、あるいは自分たちが植えた花壇や作物を被災地の方と確認するために再び被災地を訪れている。現場の方の側に立った見方ができるようになり、これが将来学生の大きな力になることは間違いない。

### (3) ボランティア活動の支援体制について

前回の報告書で横山准教授からも詳細に指摘があったように、京都大学学生ボランティアの支援は、その募集から引率までほぼすべてをフィールドセンターが行っている。一方で、フィールドセンターの教員はほぼすべてがフィールドでの自然科学を対象とした教育研究を行っており、ボランティア活動にはほぼ素人の研究者である。引率などを担当した場合には、学生との事前の打ち合わせを含め、本務の活動とは異なることに限られた時間を使うことになる。事務関係もフィールド研がすべて対応しているが、全学の学生へのアナウンスや保険の手配、活動に必要な消耗品の準備など非常に煩雑で時間のかかる作業を継続的に行うことは不可能である。特定の個人へ負担が集中することは望ましくないものため、活動期間中だけでも前後の活動に分けて対応を行うようにしたが、引率を無理なく行うには常時4名の教職員が付き添う体制(1回のボランティア活動に延べ8名の引率者)が必要である。年に2回の活動であれば、延べ16名の教職員が必要となる。総数の少ない小部局であるフィールドセンターでは、分担して対応するのにも限界がある。

一方、このような活動が学生に与える影響を追跡することは、教育的価値も、学術上にも非常に意義深いものであると思われ、学内の教育・人間形成関連の部署の対応が望まれる。今回の活動においても、事前に他部局にも問い合わせたが、対応が可能な部局はなく、京都大学としての支援と対応が必要であると痛感している。

(文責 徳地)

## 6. 記録

### (1) 記録写真



9月23日 7:00 行きのバス車内



23日 21:00 からくわ荘での夕食



24日 気仙沼市役所の外観



9:25 気仙沼市役所での取材



24日 14:50 気仙沼高等学校での授業1



気仙沼高等学校での授業2



24日 16:00 気仙沼高等学校での座談会



気仙沼高等学校生徒会との交流



25日 8:30 唐桑ビジターセンター訪問



10:10 三陸復興国立公園見学



10:40 解体中の第十八共徳丸



12:00 気仙沼の郷土料理



14:00 大島見学1



大島見学2



26日 9:00 室根山での活動1



室根山での活動2



13:00 舞根湾での活動



15:00 畠山重篤社会連携教授



27日 9:00 カモメネットでの活動1



カモメネットでの活動2



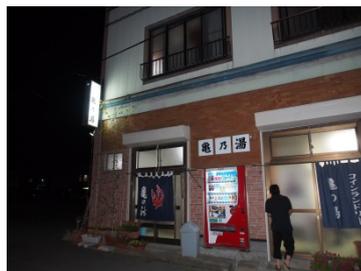
カモメネットの後藤氏



15:15 陸前高田市見学



集合写真



16:30 亀の湯

### (3) 第五回学生ボランティア派遣の応募チラシ

#### <事前説明会>

## 森里海連環学で東北復興を！



### 第5回京都大学学生ボランティア派遣説明会

京都大学では、夏休みを利用して東日本大震災で被災した東北地方の復興をお手伝いする学生ボランティアを派遣します。事前にボランティアの支援内容を話し合ってもらうために、募集開始前に説明会を開きます。この説明会では前回までのボランティアに参加した学生より、これまでの活動の経緯が紹介されるとともに、今回の活動内容を検討します。第5回ボランティアに参加希望の学生は、必ず説明会に参加されますようお願いいたします。説明会に参加できない場合は、下記問い合わせ先にご相談下さい。



2013年3月の学生ボランティアの様子

写真左：高校生への学習支援 写真右：牡蠣養殖作業の補助  
これまでのボランティアの様子は、ウェブページを参照。

ボランティア期日(予定):

2013年9月23日(月)～28日(土)

活動場所:宮城県気仙沼市



**内容:** 労働ボランティア: 学習支援, 養殖業補助, 環境整備など

研究ボランティア: 期待される調査は、森林資源調査, 湿地を含む河川から海までの水質調査など  
(研究ボランティアを希望する方は、ご自身で研究計画を立てられた上で、下記の問い合わせ先にご相談ください)

**募集人数:** 労働ボランティア 20～25名、研究ボランティア 若干名

**募集対象:** 京都大学の学部学生・大学院生・研究生等

**説明会日時:** 2013年7月4日(月) 18:30～20:00

**説明会場所:** フィールド研会議室(吉田キャンパス北部構内 農学部総合館2階 N283)

**募集期間(予定):** 2013年 7月 8日(月)～12日(金) 17時まで ※先着順ではありません

**派遣期間(予定):** 2013年 9月23日(月・祝)～28日(土)

**募集方法(予定):** フィールド研のウェブページよりボランティア申込書をダウンロードして、所属学部・研究科の教務掛に提出してください。申し込み人数が定員を超えた場合、説明会での出席と申込書に記入された志望動機等をもとに、参加学生を選考する予定です。

**問い合わせ先:** 京都大学フィールド科学教育研究センター

電話: 075-753-2268 (徳地直子教授)

メールアドレス: tokuchi@kais.kyoto-u.ac.jp



<http://fserc.kyoto-u.ac.jp/wp/kesenuma>

## 森里海連環学で東北復興を！



### 第5回京都大学学生ボランティア募集

京都大学では、夏休みを利用して東日本大震災で被災した東北地方の復興をお手伝いする第5回学生ボランティアを派遣します。以下の要領でボランティアを募集します。誘い合って東北の復興に出かけませんか。



期日：2013年9月23日(月・祝)～28日(土)

場所：宮城県気仙沼市

集合場所：京都大学正門前  
：JR「一ノ関」駅(一ノ関までは自己負担)



#### 2013年3月の学生ボランティアの様子

写真左：高校生への学習支援 写真右：牡蠣養殖作業の補助  
これまでのボランティアの様子は、ウェブページを参照

内容：労働ボランティア【学習支援、養殖業補助、環境整備など】20～25名

ボランティアの内容は、派遣学生によって自主的に検討していただきます。検討会は派遣までに何回か開催しますので、必ず出席してください。また、7月4日(木)18時30分より20時まで事前説明会を開催しますので、申し込みを検討している方は必ず出席してください。説明会に参加できない場合は、応募開始までに下記の問い合わせ先まで相談してください(学生ボランティアの方で個別に情報提供・質問受付を行います)。

研究ボランティア【期待される調査は、森林資源調査、湿地を含む河川から海までの水質調査など】若干名

気仙沼の舞根湾で津波後の環境・生物調査を行っています。研究ボランティアはこの調査活動の範囲の中で行っていただきます。研究ボランティアを希望する方は、ご自身で研究計画を立てられた上で、下記の問い合わせ先にご相談ください。

ボランティア募集対象：京都大学の学部学生・大学院生・研究生等

ボランティア募集期間：2013年7月8日(月)～12日(金)午後5時まで

※この期間にフィールド研に届いた応募は全て受けつけます(募集人員を超えると選考あり)

ボランティア応募方法：フィールド研ウェブサイトより、ボランティア申込書をダウンロードして、必要事項を記入の上、所属学部・研究科の教務掛に提出してください。申し込み人数が募集人員を超えた場合、申込書に記入された志望動機等をもとに、派遣学生を選考します。

日程：9月23日(月・祝)午前7時 京大正門前からバスで出発

(または9月23日午後6時頃、JR「一ノ関」駅にてバスに合流、「一ノ関」駅までは自己負担)

同日夜、国民宿舎「からくわ荘」(宮城県気仙沼市唐桑町崎浜4-1)着

9月24日(火)～27日(金)ボランティア活動(内容は派遣学生を中心に検討)

9月27日(金)夜 気仙沼市からバスで出発

9月28日(土)昼頃 京大正門前着

同行者：京大教職員2～3名

費用：往復バス代、宿泊費およびボランティア保険料は京都大学が負担。

食費(約1万円)のほか学習支援にかかわる飲食費など(数千円)は本人負担。

服装・持ち物：汚れてもよい作業着など、着替え、雨具、リュックサックのような両手が自由になる荷物入れ、洗面具など。長靴は京大が用意。

応募条件：必ず学生教育研究災害傷害保険に加入しておくこと。

問い合わせ先：京都大学フィールド科学教育研究センター

電話：075-753-2268(徳地直子教授)

メールアドレス：tokuchi@kais.kyoto-u.ac.jp



<http://fserc.kyoto-u.ac.jp/wp/kesenuma>

### (3) 事後報告会に関して

主催：第5回京大学生ボランティアメンバー

日時：平成25年11月13日（水）18時30分～20時

場所：京都大学フィールド科学教育研究センター第1会議室（N283）

- 議題：
1. 今回の活動報告
  2. 成果と反省点のディスカッション
  3. ボランティア活動の今後について



## 7. 特記事項

### ・放射能測定の結果

第5回 東北学生ボランティア線量計（H25.9.23-9.28）

学生が携帯していたもの（4名） 7～45  $\mu\text{Sv}$

職員が携帯していたもの（2名） 1～8  $\mu\text{Sv}$

職員の一人が携帯していたもので2577  $\mu\text{Sv}$  が記録されていたが、携帯電話との誤動作の可能性が指摘されている。

## 8. 謝辞

気仙沼高校では、第2回より引き続き校長の小山 淳先生をはじめとする数多くの先生方のご理解を得て、学生たちも納得できる成果を挙げることができた。また、今回の活動でも、畠山重篤氏、畠山 信氏をはじめとする水山養殖場の方々には色々とお世話になった。そして、紫市場

復興商店街・復幸マルシェの方、各店舗の方々、カモメネット、馬場国昭氏には、震災時の様子やその後の復興状況を説明していただいた。また、気仙沼市役所の皆様にはお忙しい業務の中、お時間をいただき、学生諸子への対応をいただいた。からくわ荘経営者の佐藤達也氏には、我々の今後の活動の継続に向けたさまざまなご提案をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。